No. 194 号

営農レポート Niigata

No. 1
平成２３年４月８日
発行　：　JA・全農にいがた

有機入り元肥一発肥料の上手な使い方

近年、減々栽培に対応した有機入り元肥一発肥料の使用が増えています。

有機入り元肥一発肥料については省力化や後期栄養持続などの効果が期待できる反面、使用方法や稲の生育など注意すべき点も多くあります。

ここでは有機入り元肥一発肥料の上手な使い方について紹介します。

１．有機入り元肥一発肥料の使用上のポイント

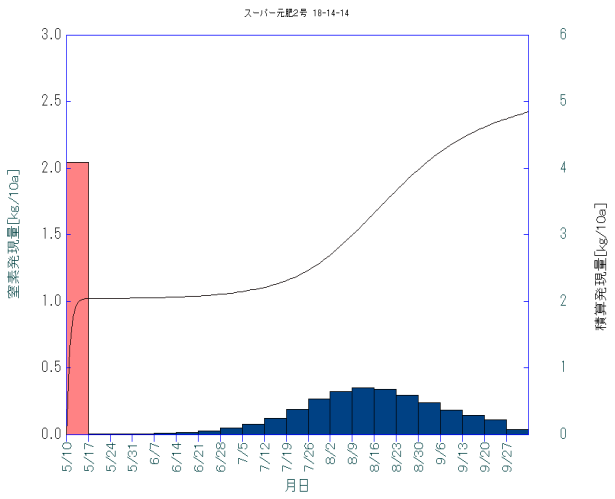
① 施肥量の決め方は、従来の元肥＋穂肥の窒素施肥量から１～２割減らす。

② 散布は均一にする。（重ね撒きは、過剰生育につながる）

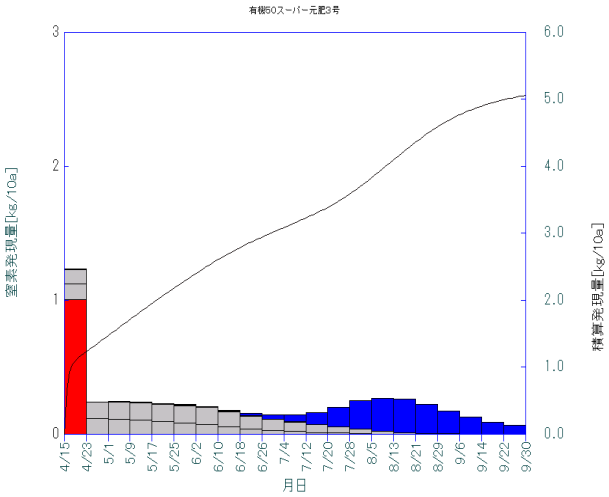
③ 夏場の水管理は特に注意する。（水が無ければ窒素が溶出されない）

２．窒素の溶出パターン

窒素溶出シミュレーショングラフ（施肥から稲刈り時期まで）



スーパー元肥２号（無機）



有機５０スーパー元肥３号
（有機由来窒素５０%）

※ 棒グラフは期間毎の窒素溶出量。線グラフは積算の窒素溶出量。

◎有機入り元肥一発肥料の特徴

（１）有機が入っている分、速効性肥料が減少　**⇒穏やかに肥効が持続**
・・・無効分げつの抑制

（２）つなぎ肥で有機が徐々に出てくる　**⇒葉色がやや淡く推移する**
※穂肥時期でＳＰＡＤ値３０を下回った場合、追肥を行ってください！！

（３）穂肥分の緩効性肥料が登熟後期まで持続する　**⇒元肥一発肥料全般の特長**

※掲載内容の無断使用・転載を禁じます。

３．側条施肥での注意点

有機入り肥料は化成肥料に比べてかさが増し仮比重（かさ比重）が小さくなるため、

有機入り肥料を側条施肥する際には施肥機の調節が必要です。

（田植機は仮比重（かさ比重）：０．９を基準設定としているため）

◎開度調節と施肥量の目安（例）※ヰセキ取扱説明書による

施肥量（kg/10a）		開度目盛 40	50	60	70
仮比重（かさ比重）	1.0	44	56	67	78
	0.9	40	50	60	70
	0.8	36	44	53	62
	0.73	32	41	49	57
	0.7	31	39	47	54

「有機５０スーパー元肥３号」
⇒仮比重（かさ比重）：０．７３

計算式：施肥量（ｋｇ）×（投入する肥料の仮比重÷標準仮比重（０．９））＝実際に落下する量(kg)

（１）開度目盛「５０」で設定した場合、仮比重（かさ比重）：０．９の肥料が５０kg／１０ａ落下するのに対し、仮比重（かさ比重）：０．７３の肥料は４１kg／１０ａの落下量になります。

（２）本会が実施した試験（ヰセキ側条施肥機）の結果は以下のとおりになりました。
開度目盛「５０」で設定した場合　⇒　３８ｋｇ／１０ａ落下
開度目盛「７０」で設定した場合　⇒　５２ｋｇ／１０ａ落下

※上記の数値はあくまでも目安です。
実際は、型式や年式によって異なりますので、『試し繰り出し』で施肥量を確認してから、施肥作業を行ってください。

◎まとめ

①上記の結果から、側条施肥機の開度設定は**基準（仮比重（※かさ比重）0.9の肥料）と比較して２～３割大きくする必要があります。**

②ただし数値はあくまでも目安であり、施肥機の年式や肥料性状との相性等で誤差が生じる場合があるので、**「試し繰り出し」を行い、実際の施肥量を確認してから作業を開始してください。**

※ご不明な点がございましたらお近くのＪＡまでお問い合わせください。

（全農新潟県本部　肥料農薬部肥料農薬推進課）

※掲載内容の無断使用・転載を禁じます。